千里金蘭大学紀要　18　013－024（2021）

〈原著論文〉

言葉のイメージと音楽創作活動の関連性
－保育内容（表現）における絵本を用いた創作活動－

Relationship with Image of words and Creative Musical Activities
Creative Activities using Pictures books in Methods and Skills of Childcare:Expression

辻　ゆき子[1]

要旨

保育者養成校の音楽教育には、基礎的な音楽の知識や技能だけではなく、学生自身が心動かし感性をより豊かにするための体験的な学びや自ら創り出す活動が重要である。本稿は、絵本をもとにその中の台詞に着目して、学生自らがその台詞の内容や絵本の展開、登場人物の心情を感じ取り、台詞のリズム感を活かしながら自由な曲作りを行う実践を通して、学生たちがどのようにイメージをもちそれを受けてどのような音作りを行ったのかを検証したものである。さらにこの演習が学生の音楽性の向上、表現力の育成及び資質の向上にどのような影響を及ぼすのかも探った。結果的には、学生にとって容易な課題ではなかったが、試行錯誤を重ねて自作の曲を完成することで達成感や自信に繋がり、同じ題材での活動なので、他の作品に共感したり違いを認識したりして、表現することの楽しさや奥深さを感じることがわかった。さらに、完成した曲に音楽的なリズムや構成の共通点や特徴があることも明らかになった。

キーワード：保育内容（表現），絵本，台詞，イメージ，曲作り
Methods and Skills of Childcare:Expression, Picture books,
Lines, Image, Songwriting

Ⅰ．はじめに

幼児期の教育を木に例えると、その後の人生の根幹となる根の部分であり、その部分をいかに直接的・体験的な保育内容で育てられるかが重要となる。現行の幼稚園教育要領や保育所保育指針においては、保育内容（表現）には「感じたこと、考えたことなどを表現したり、自由にかいたり、つくったり、自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう」という項目があり、そのような子どもの創造性を引き出すのには、保育者自身の感性や創造性の育成が求められる[(1)]。

1．自己表現の重要性

表現とは、自身の考えや思いや感情を表してみせることであり、その方法は声・表情・音楽・造形・言葉・身振りなど様々な手段がある。特に幼児の表現活動は、生活の一部であり遊びである。自由に表現することで達成感が生まれ、それを他者に受け入れられることで自己肯定感にもつながる。吉野ら（2006）は、「その表現が大人の考え方で抑えられたり、ある一定の枠の中にはめられたりすると、表現は狭められ、活力も生まれにくくなる。ひいては、感性も貧しく、表現しようとする意欲も乏しくなりかねない」としている[(2)]。

このように子どもたちにとって不可欠である表現力を豊かなものとし感性を育むためには、それを担う保育者の感性が非常に重要となってくる。保育者養成校においては、学生にどれだけ豊かで体験的な自己表現の場を提供できるかが重要であり、その中で学生自身が自由に表現し、他者に認められ、他者の表現に心を寄せる経験をすることが求められるといえるだろう。

音楽の分野でいえば、音楽を多角的に捉える力が必要である。中島（2018）は「単に楽器演奏の技術が優れている、歌を上手に歌える、音楽的理論に精通しているというだけでは、子どもに対し

1　Yukiko TSUJI　　千里金蘭大学　生活科学部　児童教育学科
受理日：2021年９月２日
査読付

て一方通行的な指導になりかねない。子どもの姿を注意深く観察し、必要性を察知し、その上で音楽の楽しさを様々な形で提供することができる指導者の育成が重要なのである。」としている[3]。山口（2020）も「保育現場では一般的に、音楽の領域の保育は保育者主導によって、望ましい音楽的表現の習得が目指されていることが多い。子ども自らの自由な表現が受容され、そこから発展されるよりも、まとまった音楽表現へと導かれているといえる。」としている[4]。

従って保育者養成校における音楽関連の授業では、学生自身が既存の曲をただ楽譜の通りに演奏するだけではなく、自分自身で音を感じ、音を楽しみながら表現を模索することが必要となる。三輪（2011）は「保育者に求められる音楽的な能力、資質のひとつに、子どもの思いを感じ取り、素朴な表現を受け止められる力、音楽の構造を理解し、幼児の表現が今後どう育っていくのか見通せる力がある。この力は自分自身の体験と重ね合わせ想像し理解するところから育つものと考える。」としている[5]。

２．創作活動について

音・音楽とイメージの関わりでいうと、音楽においては鑑賞・演奏・創作という３つの音楽行為の全てでイメージを関わらせた指導がされてきたといえるが、創作に関しては、経験していない大学生が多いことが小島（2009）の研究でも明らかになっている[6]。

音・曲作りの演習においては本研究と同様に絵本を用いたものが多数みられる。竹内・奥（2007）は絵本の中の音楽・画・言葉・テーマに着目して絵本の音楽性を明らかにしている。その中で、「読み聞かせは画のタッチやトーン、言葉のリズムなどに影響を受けているように見える」とし、また、「絵本において表現される言葉の全てに音声化による音楽性が内在している」と述べている[7]。安氏（2015）は、学生が各々選択した絵本に音楽をつけていき、音楽をつける際に絵本の何に注目し、どのような音楽として表現したのかについて、学生の記述と創作曲について分析した。また「絵本には音楽的な要素が含まれ、また音楽と連動させやすいことから、絵本に合う音楽を作る楽しさを体験しながら、自らの感性を培い、創造性を養うことを目的として本研究では絵本を取り入れた。」としている[8]。

末廣（2017）は、「だるまさんがころんだ」を題材に言葉の抑揚やリズムを考えて音を付ける活動を中学１年生の音楽科の授業で行っている。その際の手順は、①言葉の抑揚を探る②抑揚を参考に音程を考えリズムと組み合わせるというものだった。複数名で取り組み、協力しながら音を探し記譜することで達成感が大きく次の意欲につながったとしている[9]。

三輪（2011）は絵本を用いた音作りで、音楽的なアドバイスを全くせずに絵本のイメージだけを手掛かりに全くゼロから作り上げた結果、登場する者の動きや聞こえてくる音を単独でなぞらえて表すだけの結果になったという[10]。そこで2013年に再度創作の過程として①絵本のイメージは－と問いかけ、目指すもののイメージがもてるような働きかけをしてからどのような音楽を作りたいのかという手順で進めた結果、登場人物の心の動きを読み取ってイメージし、音の出し方、テンポ、楽器の組み合わせを工夫した曲作りができたとしている[11]。

３．本学の創作に関する演習

本学のこれまでの音楽に関する創作活動としては、2015・2016年度に、学生自身のもつ自由なイメージを短いメロディにして発表するということを行っていた。前述の三輪（2011）の実践と同様にあまりにも漠然としていて、何から手を付ければ良いのかがわかりにくく、ある程度音楽の知識・技術のある学生はそれなりに曲に仕上げたが、知識も乏しく苦手意識のある学生はなかなか形にならず、ただただ難しい課題として終わってしまったという経緯がある。またそれぞれの作品があまりに異なることで、お互いに共感したり違いに着目することが難しかった。

学生にとってイメージしやすく、創作の手掛かりになる要素が多いものとして絵本の利用を考えた。しかし、その際にお互いの作品に興味・関心をもって欲しいという筆者の思いが強く、そのため多くの先行研究のように絵本のイメージを自由に表現・創作するのでは本学の以前のような結果になることが懸念された。そこで絵本の中のこちらが指定した４つの台詞（言葉）に対してメロディをのせるという形で行った。台詞を選ぶ際には、まず最初に必ず絵本を読んで全体の世界観を捉え、各台詞の場面や情景、登場人物の心情などを把握・想像してから選ぶように促した。曲作りにあたっ

てはピアノの苦手な学生も多いことから、まずはイメージを鼻歌で構わないので考え、抱いたイメージから自由に、柔軟に、音作りを進めていくように指導を行った。共同作業にせず個々の課題としたのは、学生一人ひとりがこの課題に真摯に取り組むことを望んだからである。結果として過去の創作演習とは明らかに異なり、やるべきことが比較的わかりやすく、完成形のイメージもつきやすいため、四苦八苦しながらもオリジナルの曲を各自が完成し、達成感を感じる学生の姿を見ることができた。その中において、同じ台詞を選んで曲作りをしても、リズムや音の構成がかなり異なっていたり、反対に似かよった感じに仕上がっていたりと興味深い結果が多く見られ、それは学生の抱くイメージの違いなのではないかと考えた。また、４つの台詞から自由に選ぶことにしていても、例年選択数が多いものと少ないものがあり、これに関してもどのような理由があるのかを探ってみたいと考えた。

４.「ぐりとぐら」について

①　絵本「ぐりとぐら」について

「ぐりとぐら」は1963年に福音館の月刊「こどものとも」で刊行された中川李枝子作、山脇百合子絵の日本を代表する絵本である。その後、シリーズとしてたくさんの作品が出版されている。

②　ぐりとぐらの曲

「ぐりとぐら」シリーズの絵本にはほとんどどれも歌が入っている。作家の中川氏は話の中に出てくる歌について「お話を作るときはメロディとしては考えない。ただ、詩として、ただ歌として書いている」と述べている。また「特に子どものためのお話を書くときは言葉に制限があるので、子どものわかる言葉で最大の効果を出すために詩がいい。広がりもあるし」とインタビューで応えている。中川氏はこの歌について、「普通に読んでもいいし、節をつけたい人は節をつけて自由にやって欲しい」とも述べている[(12)]。

特に有名なのが「ぐりとぐら」の中の「ぼくらのなまえは　ぐりとぐら　このよでいちばんすきなのは　おりょうりすること　たべること　ぐりぐら ぐり ぐら」という歌である。

多くの家庭や保育の現場では、母親や保育者が自由に節をつけて子どもと一緒にこの絵本を楽しんできた。児童文学の研究者でイギリス文学者、歌手でもある鷲津名都江は、「絵本などを見てそこから歌が生まれる場合は、まず詩（ことば）があって、その内容に沿ってリズムとメロディが湧き出てくることが多い」と言い、また「それぞれに暮らす地方の言葉のアクセントが、歌にもちゃんと出ていて、関西は頭にアクセントがきて、関東は後ろにアクセントがくる。」としている[(12)]。日本のわらべ歌やイギリスのマザー・グースなどの伝承の歌も、地方によって、また人によって違っていることも珍しくなく、このぐりとぐらの歌も歌いやすい形で生まれ、それぞれの場所で楽しまれてきているのだと考えられる。

５．今回の演習の内容

前述の「ぐりとぐら」の中の歌については、すでにたくさんの方が曲を作って歌い、ＳNSにも多くが投稿されている。そこで本授業では、同シリーズである「ぐりとぐらのえんそく」の中の４つの台詞に着目し、これらを利用して創作活動をすることとした。演習の内容は、４つの台詞の中から自由に選んだものに、絵本のストーリーや情景、登場人物のキャラクターなどを感じ取り、約１か月かけてオリジナルの曲を創作するというものである。調性・拍子・旋律・リズム・テンポ・音域・伴奏の有無・前奏や後奏の有無などの制限は全くなく、自由に曲作りをして良いことにしている。但し、記譜する際の書き方の質問は受け付けている。

★「ぐりとぐらのえんそく」及びピックアップした４つの台詞について

「ぐりとぐらのえんそく」は1979年に発行されたシリーズ４冊目の絵本である。２匹の野ねずみがお弁当をもって野原に遠足に行き、毛糸を見つけて巻いていき、最後に毛糸の持ち主である熊と出会うという絵本である。

本演習では、リズム感のある文字列である以下の４つの台詞部分をピックアップした。

Ａ：いくらリュックがおもくても
　　くたばらないぞ ぐりとぐら
　　えんそくのたのしみは
　　リュックのなかのおべんとう

Ｂ：はしれはしれ ぐりとぐら
　　いばらくものす なんのその
　　とびこえふみこえ かきわけて
　　はしてはしれ ぐりとぐら

Ｃ：はなすな おせおせ　ころぶな よいしょ
　　くたばらないぞ ぐりとぐら

どこまでだって ついていく
D：はるかぜ そよそよ　せなかに そよそよ
おひさま ぬくぬく　せなかに ぬくぬく

Ⅱ．研究の目的

本学の保育内容（表現）で実施している絵本をもとにした曲作りにおいて、台詞（言葉）の中の何に着目し、そこからどのようにイメージをもったのか、そしてそれを受けてどのような音作りを行ったのかを探り、言葉のイメージと音楽創作活動の関連性を検証する。さらにこの演習が学生の音楽性の向上や表現力・意欲の育成、資質の向上にどのような影響を及ぼすのかを検証する。

Ⅲ．方法

本授業を履修した学生の創作作品及び実践後の考察レポートを検証・分析し、台詞ごとのイメージの違いや共通点、完成した作品にどのような音楽的な特徴があるのか、また学生の表現力育成の効果を明らかにする。

１．調査対象

千里金蘭大学児童教育学科の以下の学生を対象とした。

＊2019年度に本授業を履修した３年生：33名
＊2020年度に本授業を履修した３年生：52名
＊2021年度に本授業を履修した３年生：46名

２．調査時期

2021年度　７～８月

３．調査方法

毎年、履修者全員の前での創作作品の発表会を実施し、その後作品の楽譜と実践後の考察レポートの提出を求めた。2021年度については、2019・2020年度のレポートの内容よりも詳細なイメージについての質問を盛り込んだ考察レポートの提出を求め、作品と照らし合わせて各自のイメージや音楽的な特徴の検討を行った。

４．分析方法

音楽的特徴については統計的に処理し数値化した。イメージの内容等複数回答を得たものについては、同様のものを集めてグルーピングし数をカウントしたうえで、その傾向を検証した。

５．倫理的配慮

学生には研究の趣旨と目的・調査方法について書面および口頭で説明し、個人を特定されることはなくプライバシーは守られること、研究への参加協力の有無が成績には一切関係ないことを伝え、協力参加に関しては各自の署名をもって意思の確認を行った。2019年度及び2020年度については、将来的に研究の対象とすることを見据え、各履修年度に研究の趣旨と目的・調査方法について2021年度と同様に書面および口頭で説明した。

本研究は、千里金蘭大学 人を対象とする研究倫理審査委員会にて承認済みである。
承認番号k21－007

Ⅳ．結果および考察

１．選択した台詞及びイメージ

学生が４つの台詞のうち、どれを選択したのかを表したのが表１であり、全体の割合を表したものが図１である。

表１　選択した台詞の人数と割合

台詞	A	%	B	%	C	%	D	%	計
2019	7	21	15	46	6	18	5	15	33
2020	11	21	20	38	6	12	15	29	52
2021	15	33	18	39	4	9	9	19	46
計	33	25	53	41	16	12	29	22	131

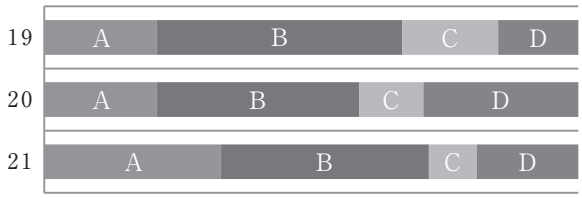


図１　年度ごとの選択数を割合で表示
※ABCDは、選択した絵本の中の台詞

例年、Bを選択する学生が多く、Cが少ない傾向にあることがわかる。その差は何に起因するのかも以下のイメージの捉え方において探っていく。

過去２年間の学生たちの実践後のレポートにおいて、選択した台詞からどのようなイメージをもって曲作りに臨んだのかを尋ねた。それぞれの台詞で以下のような回答があった。

表２　台詞ごとのイメージ

A	遠足への期待、楽しみ、頑張り、楽しい、力強い、ワクワク感
B	元気、楽しい、ワクワク感、期待、テンポ
	リズミカル、スピード、疾走感、勇気
	頑張り、ぐりとぐらのかわいらしさ
C	力強さ、負けないぞ、応援、ワクワク感、探検、前向き、コミカル
D	やさしい、暖かい、穏やか、明るい、春
	ほっこり

2021年度は、過去のレポートよりももう少し詳細に曲作りのプロセスについて検討したいと考えた。そのために、台詞に対してどのようなイメージをもったのかを明らかにするために、過去２年間に多く出た17種類のワードの中から自分の感じたイメージを選ぶようにし（○ 複数回答可、但し３つ程度）また、その中で最も強く感じたものを◎として回答してもらった。○を１点，◎を２点として点数化したものが以下に示す表３である。合わせて、感じたイメージを最も感じたのは台詞の中のどのフレーズかについて尋ねた結果が表４である。

表３　台詞ごとに選んだワードの点数化

ワード	A	B	C	D
	15名	18名	４名	９名
元気	7	16	2	0
明るい	5	6	1	2
楽しい	6	9	0	0
優しい	0	1	0	8
暖かい	4	0	0	14
穏やか	0	0	0	5
ほっこり	2	0	0	8
期待	13	6	0	0
楽しみ	7	3	0	0
疾走感	0	6	2	0
スピード		12	1	
テンポ	6	14		1
頑張り	2	5	3	
力強さ	3	2	1	
応援	1	1	5	
勇気		2	1	
前向き	4	8	1	

※上位３位までを網掛け

表４　最もそのイメージを得たフレーズ

台詞	フレーズ	人
A	・えんそくのたのしみは～ リュックのなかのおべんとう	10
	・いくらリュックがおもくても	6
B	・はしれはしれ	10
	・とびこえふみこえかきわけて	8
	・なんのその	4
C	・くたばらないぞ	3
	・はなすなおせおせ	1
D	・はるかぜそよそよ	6
	・おひさまぬくぬく	8
	・せなかにぬくぬく	2

選んだ学生の人数にかなりの差があり、一概に結果については断定できないが、それぞれの台詞によっておおよそ同じようなイメージを抱いていることが表３・表４からわかった。D以外の台詞は､やはりぐりとぐらのキャラクターからか「元気」というイメージをもつ者が多かった。Aは遠足の醍醐味であるお弁当への期待感が強く感じられ、Bは「走れ」というフレーズから元気で疾走感やスピード感、テンポ感などのイメージを、Cは「くたばらないぞ」というフレーズから、頑張っている姿に応援したいという気持ちになった学生が多かったことがわかる。Dは、この台詞だけは熊の場面のもので、他の３つとは明らかにイメージが異なり、春の穏やかで暖かくやさしい雰囲気を感じていたことがわかった。

これらのことから、Bの「走れ」という直接的なフレーズから２匹がスピーディに走っている様子が容易に想像でき、この台詞を選んだ学生が例年多いのではないかと考える。Cが例年比較的少ないのは、他の台詞と比較して、イメージを決める決定的なワードが少ない結果ではないかと推測する。

これらのワードから様々なイメージを抱いた学生たちは、絵本のどこに着目し、どのような音楽的アイデアを用いて作ったのだろうか。小島(2009)は音楽を作る着想の源について､「言葉」「絵」「動物」「オノマトペ」「展開」「気持ち」の６点が明らかになったとしている[(13)]。本演習についても、同様に６つの源が考えられるが、気持ちにおいては、登場人物の気持ちを察するだけではなく、登場人物に対する読者側の気持ち－例えば応援したい－なども加わっていることがわかった。

２．作品の音楽的な特徴

次に、それぞれの学生が様々なイメージをもって取り組んだ結果完成した曲について、台詞によっ

て何か音楽的に特徴なるものがあるのかどうかについて検証した。

３年間に学生が作った131曲について、調性・拍子・リズム・音域について検証を行った。

①調整と拍子

表５　調性と拍子

台詞人数	調性					拍子（４分の）		
	C	F	G	D	他	2	3	4
A：33	26	4	0	3	0	7	0	26
B：53	42	9	1	0	1	16	3	34
C：16	14	1	0	1	0	7	1	8
D：29	27	0	0	1	1	2	2	25

図２　台詞ごとの調性の割合
※C：ハ長調、F：ヘ長調、G：ト長調、D：ニ長調

調性については、どの台詞についてもハ長調が極めて多い結果となった。これは、音楽的知識が比較的乏しい学生が多く、１年次から調性について学んではきているが、♯やbに対して苦手意識をもつ学生が依然多く、無難なハ長調で創作した学生が多いものと思われる。また調性の変化による曲想の違いにまでは気付けなかった、あるいは思いが及ばなかったのだとも考えられる。

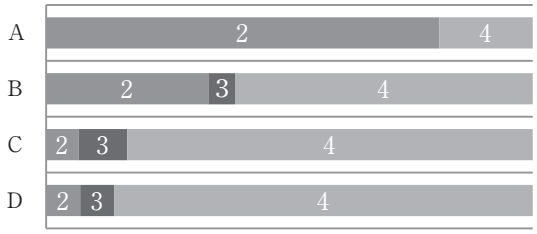


図３　台詞ごとの拍子の割合
※２：（４分の）２拍子、３：３拍子、４：４拍子

拍子はおしなべてどれも４拍子が多いが、特にC・Dにその特徴が表れている。Dに関しては、台詞自体が他の５・７調の言葉のリズムとは異なり４文字の音列で、イメージも熊のゆったりした雰囲気が感じられたため、４拍子を選ぶ学生が多かったと考えられる。Bの「走れ」というイメージからはテンポのある２拍子で作る学生が多いのではないかと推測したが、３年間の作品を見たところではそうでもないことがわかった。ただ、実際の作品の発表では、提出した楽譜上では４分の４拍子の曲となってはいるものの、演奏自体は明らかに４分の２拍子のリズムになっているものも少なからず確認できた。発表後の楽譜の指導において４分の２拍子に訂正を行い、本稿では訂正後の数値を採用している。実践後の感想・考察で「記譜することが難しかった」と答えている学生が多いことから、曲のイメージよりもカウントしやすい４分の４拍子を選んだことも理由の一つかもしれないと推測する。

②リズム

学生の作品のリズムには、それほど特異なものはあまりみられず、主に８分音符が続くタタの等拍のリズムと、付点８分音符+16分音符のタッタの付点のリズムが多く用いられていた。そこでこの２つのリズムに着目し、各台詞での比較を行った。以下は等拍のリズム及び付点のリズムを１とカウントし、そのリズムをどれだけ使用したかについてまとめた表である。

等拍：♫　付点：♩♪

表６　台詞ごとの２種のリズムに着目して

	A：33		B：53		C：16		D：29	
呼間＊	32		32		24		32	
リズム	等	付	等	付	等	付	等	付
なし	10	22	8	32	6	9	14	27
１～５	1	0	2	6	1	3	9	2
６～10	0	2	6	6	2	0	6	2
11	0	1	2	0	0	0	1	0
12	0	0	3	0	1	0	1	0
13	2	1	0	0	0	0	0	0
14	1	0	3	0	1	1	0	0
15	5	0	4		2	0	1	0
16	5	5	3	1	1	1	1	1
17	4	1	5	2	2	1	0	0
18	3	0	6	1	0	1	0	0
19～	1	1	11	5	0	0	0	0

上位３までを網掛け
＊呼間は、平均的な呼間数を表示
＊等：８分音符×２、付：付点８+16分音符

各台詞を選択した人数も、またそれぞれの作品の呼間数も異なるので、表７の数字からの単純な

比較はできないが、それぞれの台詞の作品ごとのリズムの傾向を読みとることはできた。（網掛け部分参照）

Aは、等拍又は付点のリズムのいずれか一方をほとんどの学生が使用し、併用している学生も見られた。等拍を使用するか付点を使用するかは個々の好み又はイメージの違いによると思われる。

Bは等拍のリズムを多用する学生が多く、それに対して付点のリズムを使用しない又は少ない学生が多いことがわかった。「走る」というイメージからは、スキップのリズムを想像させる付点のリズムではなく、疾走感のある等拍のリズムを多く選択したのではないかと思われる。

Cは選択した人数が少ないので傾向を探ることは難しいが、付点のリズムよりも等拍のリズムを使用している傾向があり、「よいしょ」と重い毛糸玉を力を込めて押していくイメージから弾むような付点のリズムが少なかったのではないかと推測する。

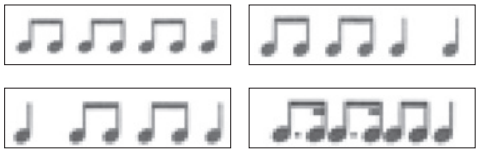
Dは等拍や付点のリズムはほとんど使用されず、４分音符中心の♩ ♩ ♩ ♩（タンタンタンタン）という単調なリズムが多かった。この台詞だけは熊が日向ぼっこをしているような情景の台詞であり、軽快な等拍のタタや跳ねる感じの付点のタッタが極端に少ない結果になったと考えられる。

この付点のリズムは、幼稚園と関連の深い歌集を年代を追って研究した西澤（2017）の研究で、1900年代の納所井次郎・田村虎蔵共編「教科適用幼年唱歌」でこのリズムが画期的に増えたことが分かっている[14]。付点のリズムは学生たちには、慣れ親しんだリズムと言えるのだろう。

＜その他の特徴的なリズムパターンについて＞

D以外の台詞では、タタとタッタのリズムを中心とした８分音符と４分音符の以下のような組み合わせのリズムパターンが多く見られた。

台詞ごとの特徴は上記の表６に示すところである。



他の特徴的なものには ♪♪♪ のリズムがあり、Bの台詞で多く見られた。このリズムは前に向かう音楽的なイメージがあるせいだと思われる。

また、他の３つの台詞とは一味違うDの台詞には、他のものには少ない以下のリズムパターンが多く見られた。シンプルな８分音符と４分音符からなり、落ち着いた雰囲気のリズムで表現している。

そして、非常に顕著にその差が表れたのは曲の初めの部分が８分休符から始まる曲である。リズム的には以下のリズムになる。 𝄾♪♫

このように休符からを始まる曲を作成したのは、ほとんどがAの台詞を選んだグループだったという興味深い結果となった。

2019年度　７名中３名（Bで１名のみ）
2020年度　11名中５名
2021年度　15名中６名（Dで１名のみ）

Aを選択した学生のうち、約半分弱の学生が８分休符から始まる曲を創作していた。　これは、Aの台詞の始まりが「いくらリュックが・・」となっており、３文字の「いくら」の部分を強調するために、又は無意識で休符を入れて作ったのではないかと推測する。Bの始まりも「はしれ」と３文字だが、３年間で休符から始めた学生は１名だけであった。Bを選ぶ学生が例年多いにも関わらず、ほとんど休符始まりの曲がなかったというのは、Bが「走る」イメージを捉えて前に向けたメロディを展開させていた結果、休符始まりの曲をイメージしなかったからではないかと思われる。

③音域

表７　台詞ごとの音域

台詞 人数	音域（再低音と最高音の度数）						
	5	6	7	8	9	10	11～
A：33	2	5	9	14	2	1	0
B：53	7	5	9	23	8	1	0
C：16	0	3	3	7	1	1	1
D：29	3	7	3	10	3	1	2

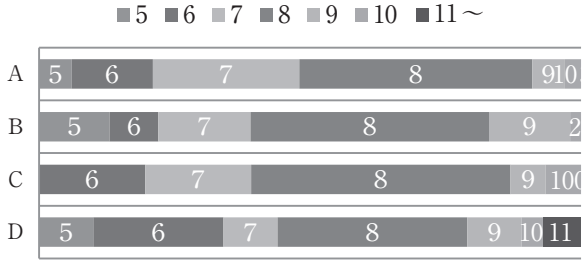


図４　台詞ごとの音域（度数）の割合

音域に関しては、台詞ごとに大きな違いは見られなかった。概ね１オクターブ又はそれに１音加えた程度の音域が多く、ハ長調が多いことから、１点ハから２点ハのあたりの音を使用していることがわかった。子どもが歌う場合、歌いやすい音域であるといえる。

④旋律

旋律的に見ると、中には個性的な独特の音選びをしている学生も見られたが、大半の作品は台詞ごとにリズムパターンが似かよっているのと同様に、主音から始めるか第３音から始めるか第５音から始めるかの違いはあれ、どこか似ている作品が多く見られた。

特徴的な点をあげると、Aの「えんそくのたのしみは リュックのなかのおべんとう」の部分で楽しみな想いを表現するべく上行する旋律線を採用している学生が多く、Bの「とびこえ ふみこえ かきわけて」の部分は上がり下がりが大きい躍動的な旋律にしている学生が多かった。またDの旋律は比較的平坦な音の並びになっているものが多かったことである。

３．実践後の考察レポートより

①この課題の難しかった点、楽しかった点

「メロディを作る作業の中で、どういった点が難しいと感じたか、また、楽しさを見いだせたか」という問いに多かった回答は以下のとおりである。（131名　複数回答）

表８　難しいと感じた点

①	考えたメロディを楽譜にする（記譜）	34
②	イメージする音が見つけにくい	33
③	リズムを考えること	12
④	メロディを考えること	6
⑤	何調にするか（調性）	5
⑥	何拍子にするか（拍子）	7
⑦	左手の伴奏	16
⑧	曲のまとまり、終始感を出すこと	9

＜※実際のレポートの記述より抜粋＞

①・鼻歌で考えたメロディを楽譜にすること
　・音符だけでなく拍子に合わせて休符やリズムも考えないといけないこと
　・イメージは割とすぐにできたが、それを譜面に表すこと

②・想い通りの音を探すのに苦労した
　・イメージの音がなかなか見つからないこと
　・台詞の中ですぐに音が思い浮かぶものと思い浮かばないものがあり難しかった
　・自分の思った音がなかなか浮かばず、さらにその音を次につながるようにしていくこと

③・歌詞に合わせたリズムを考えること

④・初めの音を何にしてそこから上がるのか下がるのかを考えること
　・同じような音程ばかりになってしまった

⑧・最後の終わりらしい終わり方が難しかった
　・曲としてのまとまりを考えること

表９　楽しいと感じた点

①	曲作りの中で、イメージしている音やメロディを見つけたり、アイデアが出てきたこと	56
②	自分だけの曲が完成できたこと	21
③	意外に合うメロディを発見した時	3
④	曲に合った和音を考えること	2

＜※実際のレポートの記述より抜粋＞

①・悩みながらメロディを考えていて、良いアイデアがひらめいたこと
　・台詞からメロディを考える最初の一歩の部分が難しかったが、ワンフレーズが出たらスラスラと曲ができたこと
　・前向きな台詞にメロディを作る中で、自分の体験を合わせながら考えていたこと
　・音符や休符、シンコペーションも自由自在に表現でき、既存の曲を演奏する時とはまた違った楽しみ方ができ、音楽の巾の広さを感じたこと
　・少し音を変えるだけで全く異なる曲になるおもしろさに気付いたから
　・歌詞のイメージを想像することは自由で楽しいことでより楽しさを見いだせた
　・リズムをいろいろ変えるだけでひとつの台詞が多くのものに変化する楽しみを実感した
　・ワクワクしながら音を探して台詞と曲をしっかりと見つめることができた
　・鼻歌で歌っていた曲が、実際に音符や伴奏をつけることで、より自分のイメージが広がっていったこと

②・試行錯誤しながら曲を作り、元気で明るい曲ができたこと

・自分の作ったメロディがしっくりきて、鼻歌でずっと歌ってしまうほど楽しかった
・オリジナルの曲ができて、達成感を感じたこと
③・自分の想い通りにならない音程でも、続けるうちに新しい発見があったこと
④・メロディに合わせた和音作りが楽しかった

難しかったこと・楽しかったことの記述から読み取れたことは以下の内容である。

作業の初めの頃に自分のイメージする音がなかなか見つけにくかったと回答する学生が多く見られた。しかし、作業を続けていく中で徐々に自分のイメージした音が見つかるようになり、その後は音探しや曲が出来上がっていくことに楽しさや喜び感じたという回答をしているものがほとんどであった。曲を作るという活動を初めて経験する学生が多く、最初は要領がつかめずに少々戸惑いを感じたが、最終的には楽しさを感じることができたという回答に至っていた。「なかなか音が見つけられず難しかった」と回答した学生のうち、最終的には「イメージに合った曲になることが楽しかった」と相反する回答をしている学生が７割ほどいた。

また、曲の終止感について困難さを感じていた学生は、自分の選んだ調性における主音の働きについての知識が乏しかったと考えられる。もちろん、独特の終わり方をあえて求めて、自身の作品に満足している学生も見られたが、困難さを感じていた学生は、いわゆる「終わりらしい感じ」を求めていたと思われる。下田ら（2003）は「メロディの開始は主和音上の音でなくても構わないが、終止音は主和音上の音で終わるほうが終止感がある。主音で終わるのが最も安定感がある。」としている[15]。そういった音楽的な知識はすでに学習済みのはずだが、いざ全てを自身で作り上げるとなると、なかなかこういったことが思い出せなかったのかもしれない。

音探しや曲作りは試行錯誤しながらもなんとかできた学生も、いざ楽譜に書く（記譜）段階で苦労したことがうかがえる。１年生・２年生の資格必修の音楽関連の授業で、音楽的な基礎理論については学んできているが、大学に入ってから楽典について本格的に学ぶ学生も少なくはなく、苦手意識をもつ学生も多い。この保育内容（表現）の授業は３年時なので、すでにある程度は音楽についての知識も頭に入り、既存の楽譜を見て歌ったり弾いたりすることに対しては支障なく実践できる学生が多い。しかし、これまでの音楽的な知識を総動員しても、一から楽譜を書くとなるとまだそこまでの力量が備わっていない学生も多くいるということがわかる。しかし、今回の演習においては、完璧に曲を仕上げて楽譜に書くことまでを求めているわけではない。活動の中で難しかった点も多々あることは否めないが、それでも自ら試行錯誤して作り上げる創作の楽しさを少しでも体験してほしいと考え演習を実施している。レポートの中に「既存の曲の練習よりも、自分で作ることや練習することはもっと楽しく、曲への愛着を感じた」というものがあり、音楽へのさらなる興味や関心につながることを願うばかりである。

また、確かな音楽的な学びともなるように、曲の発表後には各自が提出した楽譜を筆者が実際の演奏の録音をもとに、正しい楽譜となるように添削指導を行っている。自身の作成した楽譜との違いを把握することにより、今後記譜する際の参考となることを願っている。

②音楽的な工夫（2021年度）

2021年度のレポートにおいては、「自分の作品を音楽的要素から検証してみよう」という項目で回答を求め、学生がどのように音楽作りについて考えていたのかをまとめた結果は以下のようになった。複数回答で主なコメントを抜粋した。

A テンポ－６名
・早めにして、楽しみにしている感じを表現
・テンポの良い曲で明るい感じに
・遠足の楽しみさを出すためのゆっくり
・最初は疲れている感じでゆっくり
等伯のリズム－２名
・ワクワクした感じを等拍のリズムで
・期待感を表す
付点のリズム－２名
・元気な感じ
・ぐりとぐらのかわいらしさを表現
２拍子－２名
・元気な様子　　・軽快に歩く感じ
音の構成…徐々に上げていく－２名
・楽しさを　　・明るい感じに
B テンポ－４名
・早くして駆け回っている感じ
・「飛び越え」で遅くして頑張るイメージ

等拍のリズム－５名
・障害物を超えている感じ
・どんどん前に行く感じ
・テンポ感　　・スピード感
付点－４名
・明るく元気な感じ
・うきうきした気持ち
・スキップしている様子
音の構成：あげていく－４名
・向かっていく感じを
・躍動感　　・前向き
C 構成－２名
・高低差を小さくして歌いやすく
・上がり下がりを激しく躍動感
２拍子－１名
・早めの拍子で軽やかに
付点－１名
・楽しい、応援したい
D テンポ－５名
・遅くにして、ゆったり、包み込む感じ
音の構成－４名
・「おひさま」からは音をあげて空に昇っていく感じ
・音の変化があまりなく、ゆったりした感じ

今回の課題に対して学生それぞれがやみくもに取り組んだのではなく、音楽的要素から様々なイメージを感じ、それらのことを頭に浮かべて作成していた学生が少なからずいたことがうかがえた。ただ、それぞれに音楽的な要素の自身のイメージへの当てはめ方がやはり人それぞれで、例えばAのテンポに関していえば、一部の学生は「楽しみにしているから早めのテンポで」と考え、また一方では「遠足の楽しみ感を出すためにゆっくりのテンポで作る」というように全く反対のイメージで作成していたことも明らかになった。やはり、イメージや表現は個々で異なるものであり、どれも間違いではなく正解だということである。

③課題全体の考察（2021年度）

2021年度のレポートにおいては、「今回の演習における課題全般の考察」という項目で学生から回答を求めた。結果は以下に示すとおりである。

表10　課題全体に対して　複数回答（46名）

①	保育や音楽に必要なスキルに気付いた	15
②	言葉のイメージが音として表現される楽しさや効果に気付いた	11
③	表現は人それぞれで個性がある	9
④	他の学生の発表を聞き、様々な気付きがあった	9
⑤	最初は無理だと感じたが、やればできた	7
⑥	曲の音楽的な特徴に気付いた	3
⑦	伴奏の効果に気付いた	3
⑧	とにかく難しい課題だった	2

＜※実際のレポートの記述より抜粋＞
①・普段から頭でイメージをして弾き歌いをすることが大切だと感じた
・子どもと共に歌う場合に、その歌の場面の情景を想像しやすくなった
・絵本を読む際も、まず言葉をしっかりと理解する必要を感じた
・リトミック等音楽的な活動をする際に自分で曲も創作でき、保育の巾が広がった
・言葉からイメージすること、コードを理解して伴奏すること、音符や休符などの音楽的な力がつく
②・絵本の物語から曲を作ることが楽しくて、劇をしている感じだった
・とてもワクワクして曲作りができ、いつも以上に歌詞を向き合うことができた
③・子どもの表現の仕方もそれぞれだから、気持ちや感性を大切に、尊重して受けとめながら一緒に楽しむことが大切だ
・同じ台詞でも言葉ののせ方・テンポ・曲の明るさが違う。人それぞれ感じ方に個性があることがわかった
④・発表することで、他の人の表現の仕方や感じ取り方を共有することができ、様々なイメージを自分の中で膨らませることができた
・詩を声や表情で表すことはあっても音にすることはあまりなく、他の人の感じ方や新しい印象をもつことが楽しいと感じた
⑤・曲を作るなんて難しくて無理だと思っていたが、いざ考えてみるといろいろなアイデアが頭に浮かび、どんどん楽しくなった
・難しくてできないと思っていたが、イメージ通りの曲ができたときは自分に自信がついた
⑥・高い音にすると明るい雰囲気になり、テンポを早くすると疾走感を感じることができる

・拍子・テンポ・リズム・伴奏を変えるだけで様々な曲に変化するということを感じ、音を表現することは面白いと感じた

自由に絵本を選びそこに音をつけるという多くの先行研究とは異なり、本研究では同じ題材を用いることにより、自分の作品と他の学生の作品とを比較し、その共通点又は違いに着目した考察が多く見られた。

決して容易な課題ではなかったと思われるが、その中で自分なりに保育に必要なスキルや事項について気付いたり、そのような力が少しはついたと自信に繋がったり、今後保育の現場で活かしていきたいという意欲をもつ学生がいたことは喜ばしいことである。

柴田（2007）は、「おはなしや絵本の場面を『うた』にすることで新しい印象が生まれる。せりふ劇に歌を入れることからスタートして音楽劇・オペレッタに仕上げることも可能性が開かれる。保育者に作曲の素養があるだけで、子どもの生活を豊かにすることができるのである。」と述べている[16]。また下田らは（2003）、「幼児のオペレッタの指導方法を習得するもっともよい方法は、保育者自身が幼児のためのオペレッタの脚本を作ってみることである、と言っても過言ではない。そうすることによって、保育者自身も創造性を養うことができる。そして、この保育者自身が創造的であることが、幼児の中から創造性を引き出し、そのオペレッタを真に幼児のものとすることができる」と述べている[17]。養成校で少しでもこのような体験をすることは必ず今後の実践で役立つに違いない。

Ⅴ．まとめ

人が音によって表現し、何かを伝えようとするとき音楽が生まれる。石井（2018）は、「長い歴史の中で人々は、音の長さや高さ、音色や強弱など、音の様々な要素をどう組み合わせると自分の想いが伝えられるかを追求し、多様な音楽表現を生み出してきた。音楽とは、人が様々な要素を用いて自己表現するものと定義づけられる」としている[18]。

イメージや心情にあう音や音楽を作るには、絵本でいえばその場面や展開、登場人物などの気持ちを想像するところから始まる。状況を判断し、相手の気持ちを思いやることは音楽に限らず保育・教育全般に言えることである。感性とは物事に心を動かされ、受け止め、感じる力を育むことが肝心であり、そしてそのような実体験を重ね、自身の体と心に刻み込む必要があるだろう。

今回の研究では、絵本の台詞に着目してそのイメージからの曲作りを行った。各自がそれぞれに絵本を選択し自由に音を創るのとは異なり、それぞれの台詞ごとに共通のイメージや音楽的な特徴も見えた。また、同様の台詞に向き合うことで、他学生の作品に対しても真摯に向き合いお互いに共感したり、あるいはその違いに気付き尊重することができることも明らかとなった。

絵本における台詞の意味やストーリーの展開、言葉のリズムを探り、イメージを広げて音程やリズムを考えながら曲作りを行うことで表現力の育成を促し、創作の楽しさや喜びを感じ、さらに苦労しながらもやり遂げることで達成感を味わい自信にも繋がった。音楽的な基礎知識・技能を鍛え、自身の感性をより豊かにすることのできる有効な取り組みであった。

Ⅵ．反省及び今後の課題

今回のような即興的な表現として、感じたままに表現するということは音楽的経験の少ない学生にとっては難易度の高いものであったといえる。イメージしたものを自由自在に形として表すには、今回であればやはり十分な音楽的な基礎力が求められる。調性感やリズム感、記譜の術をもっと理解していたならば、さらに自由で幅広い表現ができたのかもしれない。音楽教育は与えられたものをただ再生するだけのものではないことは明らかだが、保育者を目指す学生にはやはり音楽的な基礎力、そしてそれを使いこなす応用力がさらに必要であると感じ、今以上に基礎的な事項への関心を高め、理解できる授業展開を行うことの責務を感じる。

謝辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただいた学生の皆様に感謝申し上げます。また、本研究実施に際し、多くのご助言を賜りました本学生活科学部学部長の鎌田洋一先生に末筆ながら厚く御礼申し上げます。

＜参考・引用文献＞

（１）文部科学省（2017）幼稚園教育要領
厚生労働省（2017）保育所保育指針

（２）吉野幸男（代表）（2006）．幼児音楽教育の基礎　新しい音楽教育．音楽之友社　ｐ８

（３）中島龍一（2018）．５領域「表現」における感性豊かな音楽的表現力のある学生を育成するための一考察．日本体育大学紀要，47（２），pp.161-179

（４）山口恵美子（2020）．幼児の自発的な歌についての一考察　延長保育での遊び・生活に着目して．音楽教育メディア研究，６（０），pp.35―43

（５）三輪雅美（2011）．保育者養成校における音作りの実践．学校音楽教育研究，15（０），pp.232-233

（６）小島千か（2009）．絵本を用いた音楽作りにおけるイメージのはたらき．山梨大学教育人間科学部紀要，第11巻，pp.115-125

（７）竹内唯・奥忍（2007）．絵本の中の音楽　－画・言葉・テーマとの関連に着眼して－．岡山大学教育実践総合センター紀要，第７巻，pp.27-37

（８）安氏洋子（2015）．絵本を用いた音楽創作活動により育まれる感性とその教育実践．保育文化研究，（１），pp.61-81

（９）末廣麻由子（2017）．音楽科における創作活動の授業実践－幼・小・中一貫校の特色を生かした旋律づくり－．広島大学付属三原中学校園研究紀要，第７集，pp.195-200

（10）前出　（５）と同じ

（11）三輪雅美（2011）．音楽作りを用いた保育演習の試み－２－．学校音楽教育研究16（０）pp.258-259

（12）福音館書店母の共編集部編（2001）．絵本「ぐりとぐら」のすべて　P11

（13）前述　絵本「ぐりとぐらのすべて」pp.187-189

（14）西澤志穂（2017）．幼児の音楽表現における付点８分音符＋16分音符のリズム．東洋大学大学院紀要，54，pp.319-342

（15）石井玲子（編）（2018）．実践しながら学ぶ子どもの音楽表現．保育出版社　pp.180－181

（16）柴田玲子（2017）．保育者が作る音楽環境実習生及び保育者に求められる資質．高松短期大学研究紀要，68号

（17）下田和男、石井みさ他（2003）．幼児の音楽と表現．建帛社．ｐ.145

（18）石井玲子（編）（2018）．実践しながら学ぶ子どもの音楽表現．保育出版社　p.143